



S Bメモリを我々取材班の用意したP Cに転送しながらインタビューは始まった。

「発想力で第一人者に」

栗田氏は昭和25年生まれ（昭和44年卒男坂倶楽部）。明治高校では写真部で活躍された。当時の写真事情は現在とは全く異なり、記録するフィルムも現像も印画紙に焼くプリントにも高い費用がかかり、高価で精密な光学機器という位置付けだったカメラを持つ者も稀な状況であった。明治高校の写真部には暗室があり、部活の予算内で現像作業が出来た。拡大してプリントする「引き伸ばし」もお手のもので、生徒会長の選挙運動で候補者の顔写真を活用したのは栗田氏が明治高校史上初めてなのである。この取り組みが後の栗田氏の活動の原点になったと自ら振り返った。

「減っても増えない同期会」を大切に
「いつが良い？早い方がいいな。君たちがこち来る？それともそっち行く？」スマートフォン越しにはっきり聞こえて来る声がテキパキと段取りを詰めて行く。栗田茂氏（昭和44年卒・男坂倶楽部）に取材を打診したのは梅雨時の6月末、そこから10日と経たずにインタビューは実現した。初夏の蒸し暑さも落ち着いて7月5日の夕方、中央区居酒屋「銀座升本」に栗田氏はにこやかな表情で現れた。挨拶もそこそこ持参された紙の資料をテーブルに広げ、10ギガバイトに及ぶ写真データの入ったU

発。長きにわたる活動により、今も「ゴールデングラフ賞」の授賞式に携わるスポーツ用品業界の功績者なのである。

「電話連絡網からメールマガジンへ」

栗田氏は同期会・総明会の行事や高校大学の運動部の試合等にも頻繁に出向かれていて、カメラを構える姿を見掛けたり、更に被写体となられた事がある方も少なくないだろう。同期会への参加のきっかけを伺うと、「命がけで同期会を作った友人のためだった。」と即答した。男坂倶楽部は発起人の服部雄二氏のもとに同期が結集した。その草創期のメンバーの小松盛明氏が腹膜炎を患い透析を受ける日々を送る中で「命ある限り同期に会いたい。」という切実な願いに応えるべく同級生を結集させたと言う。EメールもSNSもFAXも無かった当時、連絡は固定電話を活用した連絡網



に限られ、それでも連絡が無い同級生には仲間内で「突撃隊」を編成し、名簿上の自宅住所や勤務先をアポなしで訪問してメンバーの掘り起こしを図ったそうだ。

男坂倶楽部の活動を続ける中、ある日思い立ってパソコン操作の勉強を始める事を決心し、パソコンと周辺機器を自宅に買い揃え、電機メーカー勤務の知人を家庭教師役に迎えて10日間に渡ってEメール送受信などの基礎的スキルを習得した。程なくして親しい仲間にもメールに写真を添付して近況を送るようになり、多くの返信などの反応に奮起して明治高校の先輩後輩の活躍の様子を定期的にメールで送るうちに、いつしか約8000人の明治高校OB・OG達に一斉送信する大規模なメールマガジンに成長を遂げたのであった。取材対象としての現時点での最年長はマンドリン部の嶋崎忠彦氏（昭和27年卒・明高会）。総明会

懇親会でご子息の雅彦氏（昭和60年卒・闘紺会）との写真を撮るように頼まれたのが始まりで、最年少は明治大学硬式野球部の原尚矢氏（平成30年卒）とその差は65年と言う驚異の幅広さなのである。800人にメールを送るのは、迷惑メール対策の規制もあって普段は8〜9回に分けて送信されており大変な作業だ。別のメディア形式への移行も含めてより良い解決策は無いかと模索の日々だと言う。

「一人でも多くの人に知ってもらおう」

これまでの取材の中で特に思い出深いOB・OGについて聞いてみると、真っ先にお名前が挙がったのは宮澤政信氏（昭和34年卒・旧雨会）、歴代の会報に広告を載せ続けて頂いているマルキュー株式会社の代表取締役会長であり、昭和33年夏の高校野球東京都大会決勝で後に世界のホームラン王となる王貞治氏をエースに擁する早稲田実業を延長逆転サヨナラ勝ちで破り甲子園出場を果たしたナインの捕手で、左中間



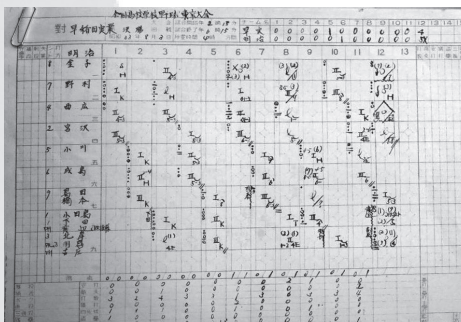
打のサヨナラヒットを放った明高史上きつてのレジェンドである。宮澤氏と面識の無かった栗田氏は明高の後輩と名乗って電話でアポイントを取り、バットとグローブを手土産に自らハンドルを握りマルキュー本社のある埼玉県桶川市に向かった。宮澤氏は栗田氏を温かく迎え入れ、その時の試合のスコアブックや全国大会を集めた雑誌の写しを提供された。明治高校野球は当時、「御大」島岡吉郎監督が率いて三度の甲子園出場を果たす強豪校となり、島岡氏は昭和27年に明治大学野球部の監督に就任した。その後の名將ぶりは皆様ご存知の通りである。昭和33年の春の選抜高校野球はエース下田義夫投手を中心とした布陣でベスト4に進出し、夏の東京都大会も決勝まで順調に勝ち進んだ。ここで栗田氏の持参されたスコアブックを読むと激闘ぶりが見て取れる。序盤から中盤は双方投手戦で5回表に早実が王氏のライト前ヒットで1点を先制、明治は6回裏に1点返した後均衡状態が続く延長戦に突入。12回表に早実の上位打線がヒットと四球でチャンスを活かして4点を奪って引き離したかに見えたが、その裏で明治は連打で一挙に5点を奪い返す大逆転勝利を取って見事に甲子園出場を決めたのであった。王氏はこの敗戦でプロ野球選手志望を決心したと言われている。明治高校野球部の選手達が東京駅から甲子園へと出発する時に王氏が見送りに来たとき

に早実の上位打線がヒットと四球でチャンスを活かして4点を奪って引き離したかに見えたが、その裏で明治は連打で一挙に5点を奪い返す大逆転勝利を取って見事に甲子園出場を決めたのであった。王氏はこの敗戦でプロ野球選手志望を決心したと言われている。明治高校野球部の選手達が東京駅から甲子園へと出発する時に王氏が見送りに来たとき

言う人柄を示す逸話が残されており、今なお語り継がれているのである。甲子園では初戦倉敷商業を3-1で破ったものの、魚津に6-7で二回戦敗退を喫した。その後昭和40年春の選抜高校野球の二回戦進出を最後に野球部の甲子園出場は途絶えている。「甲子園への出場経験がある人達がいる事を若い人たちにも知ってもらいたい」栗田氏は目を見開いて語気を強めた。

栗田氏の話は続く。法曹関係への進路を希望する在校生へのサポートする弁護士資格を持つOB・OG達の活動や、コロナ禍初期に明治中学・高校で消毒液が不足する危機に瀕した時に、総明会から多量の消毒用アルコール一斗缶を寄贈した話など、OB・OGと母校との繋がりに纏わるエピソードは枚挙にいとまがないが、限られた仲間内でしか知られていない場合が多いと考えている。OB・OGと在校生がお互い同士を高めあっているのに、これを部分的な物に留めるのはとても勿体ないと言

う。一人でも多くの人に知ってほしい思いがメールマガジンを発信し続ける原動力なのだ。「減っても増えない同期会」とは栗田氏が今まで活動を続ける中で、胸に刻んだ言葉だ。メンバーが減り続けて最終的に無くなってしまいう同期会を損得勘定抜きで楽しんで携われる事はとても貴重な事だと説く。



↑栗田氏メールアドレスはこちらのQRコードからも読み取ることができます

【会報委員会からのお知らせ】栗田茂氏のメールマガジンの配信ご希望の方は、kurishige44@gmail.com宛に氏名・卒業年（同期会名）・連絡先をご記入の上、栗田氏ご本人に連絡をお願い致します。

取材を進める最中でも栗田氏は聞き手の我々に向けて手持ちのスマートフォンのカメラのシャッターを切り、矢継ぎ早に質問を繰り返すなど、手慣れたテクニクの逆取材にたじろぐ一幕もあった。行動力・発想力に富み、バイタリティー溢れる栗田氏は明治高校OB・OGの近況を発信してこのコロナ禍にあっても、今までと変わらず私たちにエールを送り続けている。次に取材を受けるのはこれを読んでいるあなたなのかもしれない。